

カントにおける空間的把握とモダリティ

岩井 拓朗

本稿は『純粋理性批判』（以下『批判』）において空間的直観に関わる総合の在り方を考える方針を提供するものである。本稿の作業は、空間のアプリオリ性と多様な感覚との関係を考察することによって行われる。

総合は『批判』において悟性のはたらきとして導入され¹、カントが与える認識活動の説明において重要な役割を担うものである。しかしその具体的内容に関する決定的な解釈は存在していない。総合を何らかの心理学的プロセスとして理解する方針もあれば、それ以外の仕方でも理解しようとする方針もある²。そして後に見るように、カントはこの総合を対象の空間的把握にも要求している。では空間的把握に関わる総合はいかなるものとして理解されるべきか。これが本稿の扱う問題であり、その解決はカント空間論の正当な評価のために不可欠である。

この問題は次のような背景のもとで考察される。日常において私たちは五感を通じて得られる種類の異なる感覚に基づき、物理的对象の空間的な把握を行っている。例えば視覚も触覚も、ものの形、大きさ、方向などを私たちに教えてくれる。それでは、こうした空間的把握はそれぞれの感覚に相対化されているのか。それともこうした感覚の違いに関わらず、一種類しかないのか。ここで本稿はカント自身の用語である「感覚 (Empfindung)」との混同を避けるため、空間的把握において使用される視覚や触覚などの感覚を「感覚モダリティ」ないし単に「モダリティ」と呼ぶことにする³。したがって先の疑問は次のようにも表現される。使用される感覚モダリティないしモダリティは複数あるものの、空間的把握は一種類しかないのか。それとも、それぞれのモダリティに特化した空間的把握があるのか。カントは空間が外的対象の表象には不可欠なものだとする⁴。そして彼の議論はモダリティの異同等は一切考慮せず、いわば「アプリオリ」に成立している。したがってカントは空間的把握が一種類だとする立場にコミットしているように思われる。ところが総合に関する彼の記述はこの見込みを裏切り、特定のモダリティを想定しているようにも思われる。そこで本稿は空間の「アプリオリ性」を踏まえたとき、総合がどのように考えられるべきかを明らかにする。

第1節では「直観の公理」を中心に、総合の問題を提起するものとしてケンプ・スミスの古典的批判を参照する。第2節ではその批判を正確に見定めるために、

空間的把握とモダリティの関係を考察したエヴァンズの分析を参照する。第3節では彼の分析を元にケンプ・スミスの批判を整理し、カントが採るべき方針を検討する。第4節では前節で示された方向性を実際にカントに読み込み結論とする。結論を先取りするなら、総合は心理学的プロセスというよりも、空間的把握を主体が行った際にその人が行うことができなければならない振る舞いとして、換言すれば空間的把握の表出として理解されるべきである。このように考えることで、モダリティの多様性に左右されない「アприオリ」な空間的把握をカントは確保できるようになる。

1. モダリティと空間的把握

カントは「直観の公理」で空間的把握に悟性のはたらきである総合を認める議論を展開している。ここではケンプ・スミスの古典的批判に依拠しつつ、彼の議論がモダリティと空間的把握の関係について問題を含んでいることを指摘する。

さて問題となるのは例えば以下の箇所である。

すべての現象は、形式から見て、空間と時間における直観を含んでおり、この直観は現象の根底にことごとくアприオリに存しているものである。したがって現象が把握されるのは、すなわち経験的意識へと取り入れられるのは、規定された空間または時間の諸表象を産み出す、多様なものの総合を通じて以外にはありえず、すなわち同種的なものの合成とこの多様なもの（同種的なもの）の総合的統一の意識を通じて以外にはありえない。(B202-3)

詳細な解釈は以前にも試みたため省略するものの⁵、この引用においてカントは総合が対象の時間空間的な把握の成立に必要だとしている。そして続く箇所でこの総合がカテゴリーの一つである量の概念と関わることが示され、かくして対象の時間空間的な把握には量の概念のはたらきである総合が必要であるとされる。以下では対象の空間的把握に話題を限定する⁶。

ところで『批判』において私たちの認識活動は感性と悟性の協働によって説明されている。悟性は概念を使用し判断する能力であるとされ、感性は対象を与える能力であるとされる⁷。そしてこの箇所で言及されている直観は感性に由来する表象であり、基本的には対象が与えられる場面に関わるものである⁸。これらを踏まえて、本稿では判断の対象を知覚などによって見出す場面を、ここで述べられ

ている対象の空間的把握が関わる場面の典型として考えることにする。

さて上記のカントの議論について、差し当たり次の二つの疑問を指摘することができる⁹。第一に対象の空間的把握においてはたらくとされる概念の具体的な内容が、この箇所の理解には不可欠であるにも関わらず、それほど明らかではない。第二の疑問は、総合の果たす役割に関するものである。こちらに関してはカント自身の記述から多少の手がかりが得られる。まず総合は認識活動において何かを把握するために悟性によって行われるはたらきのことであるとされる¹⁰。そして量の概念に関わる総合は、一定の単位を繰り返して加算するようなはたらきとされている¹¹。以降ではこれを継起的総合と呼ぶことにする。カントの挙げている例を参考にするならば、任意の単位を用いて知覚されたものの輪郭をなぞり、その形や大きさを把握する作業がその典型であると言えるだろう¹²。このように総合の内容はある程度までは明らかにされている。しかしこうした総合が対象の空間的把握の場面において必要であるという考えはさらなる説明を要求するだろう。継起的総合はいかなる観点から対象の空間的把握に必要とされるのか。本稿が主に扱うのはこちらの疑問である。

ここで参照されるべきカントへの批判がある。それはケンプ・スミスに由来し、ガイヤーによって強化されたと言える批判である。ケンプ・スミスの批判は、知覚において継起的総合が行われているという考えが経験的な考察によって否定されるというものである¹³。ガイヤーの解釈によってこの批判はより具体的な形を取る。彼によればこの批判が訴えるのは、「私たちはときにいかなる総合なしでも空間や時間における広がり (stretches) を知覚する」(Guyer 1987, 195) という心理学的事実である。つまりカントは対象の空間的把握に総合が必要だということの、私たちは実際には総合なしに空間的把握を行えるというのがケンプ・スミスの批判ということになる¹⁴。

彼の批判は一見もっともらしく思われる。例えばコップの形や大きさを把握する際に、私たちは単位の繰り返しを数え合わせたりすることはないだろう。しかしこの批判をそのまま受け入れてはならない。この批判のもっともらしさが、視覚的知覚を想定することに由来していることに注意する必要がある。実際、例えばものの形を把握することは視覚を備えた主体にとっては非常に容易で単純なことであり、総合などそこには必要ないように思われる。コップの形を、単位を繰り返す作業などなしに、私は見るだけで把握できるように思われる。したがって視覚的知覚を知覚の典型として考えるならば、カントの考えはやはり怪しいものとなるだろう。しかし触覚の場合には継起的総合に当たる作業が行われていると

言えるかもしれない。というのも触覚に基づいてものの形や大きさが把握される場合には、ものの輪郭を手などで順番になぞり、複数回の接触で得た情報を総括する作業が必要であるように思われるからである。このようにケンプ・スミスの批判のもっともらしさは想定される知覚のモダリティに依存するのである。

しかしこれは彼の批判が的を外したものであることを意味しない。以上の考察を踏まえるならば、批判が本来意味するのは、対象の空間的把握に総合を認めるカントの考えは特定のモダリティ、例えば触覚に特化したものであるように思われる、ということだろう。本稿では両研究者の頭文字を取り、この批判を以降で **KG** と呼ぶことにする。一見したところ **KG** は空間のアプリオリな地位も脅かす威力を備えているように思われる。もしも **KG** の通りだとすれば、モダリティに関わりなく外的対象の把握に必要なだとされている空間の地位が揺らぐように思われるからである。こうした **KG** の脅威をより洗練させた形で理解するために、モダリティと空間的把握の関係についてややカントを離れた考察が必要となる。

2. モリニュー問題とエヴァンズ

ここでは **KG** の脅威を見定めるために、モリニュー問題に関するエヴァンズの考察を取り上げる。周知の通りモリニュー問題とは、触覚によって立方体と球の識別能力を習得した先天盲人が開眼手術を受けた場合、その人は目の前の立方体などを視覚によって識別できるかどうかを問うものである。この問題は哲学だけでなく心理学などのさまざまな分野に関係するため、問題そのものを理解する仕方によって答え方やその含意が変化しうるものである。本稿が取り上げる Evans (1985) は、モダリティと空間的把握の観点からモリニュー問題を扱うものである。彼が提示する **B** と **V** という二つの立場は、**KG** の脅威とそれを回避する方針を明らかにするのに極めて有用である。

エヴァンズがモリニュー問題を手がかりに考察するのは、触覚によって獲得した形に関する概念を、盲人が術後に視覚にまで拡張、一般化できるかどうかという問題である¹⁵。前節で提示した **KG** に立ち返ることで、この形のモリニュー問題をもう少し噛み砕くことにしよう。**KG** は、カントの空間的把握に関する考えが触覚に特化したものになっているという批判だった。もしも **KG** の言う通りだとすると、カントは上の形のモリニュー問題に否定的に解答することになるだろう。**KG** の主張によれば、触覚がカントの言うような総合によって空間的把握をもたらすのに対して、視覚はそうした総合なしに空間的把握をもたらす。つまり

盲人は視覚と触覚において一つの共通する空間的把握をもつ訳ではなく、それぞれのモダリティに特化した空間的把握をもつということになる。したがって開眼手術を受けたとしても盲人は視覚による空間的把握と触覚によるそれを結びつけることができるとは限らず、その人が目の前のものの形を判断できる保証はないことになる。もちろん盲人が視覚と触覚を結びつける能力を手術以前に保有していれば、その人は術後にもものの形を判断できるようになるだろう。しかしそれでも盲人が視覚と触覚でそれぞれ異なる形で空間的把握を得て、それを後に結合しているという描像は変わらない。この場合やはり盲人は一つ概念を拡張、一般化しているというよりも、二つの概念を結合しているとされるべきであり、かくしてエヴァンズ型のモリニュー問題には否定的な解答がもたらされることになる。

他方でもシカントの空間に関する考えがあるモダリティに特化したものではないとすれば、エヴァンズ型のモリニュー問題に肯定的に答えることができるだろう。この場合、盲人は視覚と触覚でそれぞれ別の空間的把握をもつのではなく、どちらの場合も一様に継起的綜合に基づく一種類の空間的把握をもつことになる。したがって盲人は触覚によって習得していた空間的把握をもたらず概念を、視覚にも拡張、一般化することになるだろう¹⁶。

さてエヴァンズは二つの立場間の論争に注目してこの問題を考察する。一方の立場はVと呼ばれる。この立場はエヴァンズ型のモリニュー問題に肯定的に回答し、盲人は視覚にも触覚で習得した概念を拡張できなければならないと考える。これは空間的把握をもたらず概念は一種類であると考えた立場であり、視覚と触覚にそれぞれ相対化された空間的概念を認めることはない。他方の立場はBと呼ばれる。この立場はVとは異なって、視覚と触覚にそれぞれ相対化された形で空間的概念を考える。したがってエヴァンズ型のモリニュー問題には否定的に回答し、盲人が一つ概念を拡張、一般化するとは考えないことになる¹⁷。

これらの立場の論争を整理しつつ、エヴァンズはVを擁護する議論を展開している。この議論は後にKGを回避する方針を理解するのに有用である。彼の議論が基づくのは、空間的把握の成立を主体の行為や思想の観点から評価するという考えである。自らが得た把握に基づいて適切に振る舞い、考えることができなければ、主体は何かを空間的に把握したとはされないというのがこの考えである。

この考えは大まかに分けると二つの段階からなっている。まずエヴァンズは、空間的な方向の理解に必要なものを考察する。彼は音の方向性の理解から話を始め、異なる方向から来る音に異なる反応を示すだけでなく、空間的な行動に方向の違いを反映できなければ、主体が音の方向を理解しているとはされないとい

る。例えばある主体が音を聞き、その音源の方向の違いに対応して手元の異なるボタンを押せるとしよう。例えば、右から来た音にはXというボタンを、左から来た音にはYというボタンをある主体がきちんと反応して押すことができるような場面を想定すればよい。それでも、その主体が音の方向を指さしたり、音とは反対の方向に歩いたりすることができなかつたとき、私たちはこの主体が方向を理解しているとは言わないだろう。エヴァンズは方向の違いを理解することと行動との結びつきが音以外のものについても当てはまると考え、この結びつきを一般的なものとして結論する。

BとVの論争を整理するためには、更に別の道具立てが必要となる。ものの方向に応じて異なる空間的振る舞いを行うだけでは、ものの形を判定するという作業には至らない。この作業のためには、対象の形に関する意識的な経験を盲人がもつことができる必要がある。例えば主体は自分が今まさに正方形のものを見ているという経験をもつ必要があるだろう。そこで次にエヴァンズはこうした経験の必要条件を考察する。結論としては、感覚器官によって得る情報が、主体が抱く世界についての思想と体系的に結びつけられていることが要求される。彼に做って椅子を知覚する事例を考えてみる。主体がまさに感覚器官から得る情報に基づいて、椅子に関する経験をしているのはどういふときだろうか。まず前述したような行為との結びつきが確保されている必要がある。これがなければ主体は椅子の位置や向きを理解しているとはされない。主体は椅子がある方向を指さしたり、椅子の背もたれがどこまで伸びているかを指示したりできる必要がある。そして経験のためにはさらに、主体は感覚器官によって得られた情報を自らの思想と結びつける必要がある。エヴァンズがこうした結びつきの典型として挙げるのは、まさにそこに椅子の形をしたものがあるという判断を下すことである。「後者の事態 [それぞれの情報が同様に直接に主体の思想に影響すること] の一つの、しかし唯一ではない表出は、主体が椅子の形をした対象が自分の前にあると判断することである」(Evans 1985, 389)と彼は言う。主体がこうした判断を下すときに初めて、私たちはまさにその人が椅子に関する経験をしていると考えることができる。もちろん他にも、その椅子に座ろうとする計画や他人にその椅子を勧めたりする発言などが椅子に関する経験を持っていることの表出として理解されるだろう。以上が感覚器官から得る情報を行為と思想との結びつきの観点から考えるという発想の概観である。今一度要点をまとめておく。エヴァンズによれば、主体が感覚器官に基づいた対象の空間的把握を持っているとされるのは、その人が感覚器官からの情報に基づいて異なる仕方で行為することができ、なおかつそ

の人がそうした情報を自分の思想と結びつけられているときだけである。そしてこの考えこそ、エヴァンズがVを擁護する議論の土台となる。

まずこの考えはVに基礎を与えうるものである。この考えは、主体が感覚器官に基づいて対象の空間的把握を行う条件として、感覚器官からの情報が行為や思想と結びつけられていることを要求するものだった。したがってモリニュー問題の主体が触覚によってものの形を判定できることは、主体が触覚によって得られる情報を自らの行為や思想と結びつけられていることを意味する。その人は触覚に基づいて、正方形の形をしたものがどちらの方向にどれくらい広がっているのかを指さすことができるであろうし、まさに正方形の形をしたものがあると判断することもできるだろう。そして、モリニュー問題の想定は、こうした主体が視覚によって正方形などの形をしたものを見ることができるようになるというものだった。これはこうした主体が視覚によって対象を空間的に把握ができるようになるという想定である。したがって主体に要求される事柄は触覚の場合と同様に、行為や思想と視覚のもたらす情報を結びつけることである。つまり、この主体は視覚に基づいて空間的な把握ができるならば、触覚の場合と同様のことができる必要がある、つまり同じ概念を拡張できる必要があるのである¹⁸。このようにしてVはサポートを得ることになる¹⁹。

Vとは、もし視覚システムが独立ではあるものの空間的には関係している現象の経験を提供することができるのであれば、そのシステムは少なくともそのような現象が行動空間において占める位置についての情報を主体に提供するシステムであるという立場であり、そしてこの事実が、或るまさに基本的な空間的概念の適用のための、視覚と触覚に共通な基礎を提供するという立場である²⁰。(Evans 1985, 394)

さらにエヴァンズはこの考えに基づくことで、Bの不整合を指摘できるとする。彼が行う二つの指摘のうち²¹、ここではKGの問題点の理解に有用である方を取り上げる。その要点は、Bは視覚が空間的把握をもたらすことを適切に説明できないというものである。Bが主張するのは、空間的把握をもたらす概念が視覚と触覚では異なるということだった。したがってモリニュー問題の主体は、例えば正方形の触覚的概念は習得していても、その視覚的概念を習得している保証はないとされる。ではこのときその人は、手術によって開かれた目によって一体いかなる空間的把握を得ることになるのだろうか。Bが含意するのは、視覚に基づい

て触覚の場合と同様の振る舞いを見せることができなくても、その人は視覚によって何らかの空間的把握を得ているということである。今その人は正方形がどちらの方に見えているのかと聞かれてもその方向を指示することはできず、また自分の眼前に正方形の形をしたものがあるかどうかを聞かれても答えることはできない。こうした状況にも関わらず、その人が視覚に基づいて空間的把握を持っているとすることに内実はあるのだろうか。エヴァンズはBがもたらす、視覚に関するこうした空間的な語り方が「比喩」に過ぎないとする²²。Vはこうした比喩を用いることなく、視覚に基づく行動や思想の観点から、視覚がもたらす空間的把握に実質ある説明を与えることができる。Vはこうした行為や思想の成功と失敗によって、空間的把握の成功と失敗を考えることができるだろう²³。しかしBにはそれができない。視覚は主体に空間的把握をもたらしているというBの語りは虚しく空転するだけである。

3. ケンプ・スミスとカント

本節は前節でエヴァンズから得られた知見をもとにKGの影響力をより詳細に検討する。KGは対象の空間的な把握に綜合を認める「直観の公理」の妥当性を疑うものだった。KGによれば、対象の空間的な把握に単位の蓄積という綜合を認める考えは特定のモダリティに特化したものであるように思われる。ここではこの批判の含意を、エヴァンズから得られた知見によって明らかにする。これによってKGの脅威およびそれを回避すべき理由、さらにはカントがKGを回避するための方針が示唆される。

さて、もしもカントの考えがKGの言うようなものであった場合、帰結するカントの立場は先述のBに近いものとなるだろう。まず継起的綜合によってもたらされる空間的把握とは触覚に基づくような空間的把握であるとされる。そしてKGの根拠には、視覚は空間的把握をもたらすにも関わらず、そこには継起的綜合が見出されないように思われるという洞察があった。したがってKGにおいて視覚の空間性は否定されるのではなく、継起的綜合とは異なる仕方でもたらされることになるだろう。このようにKGにしたがうカントの学説では、視覚と触覚はそれぞれまったく異なる仕方でもたらすことになる。つまりKGが意味するのは、カントの空間論はBの立場を採用しているということである。

しかしやはりカントがBの立場を採用していると考えることには問題がある。まずその場合カントはBと同様の問題を抱え、視覚の空間性を説明する術を欠く

ように思われるのである。Bを採用したカントは触覚の空間性であれば継起的綜合の観点から説明することができる。例えば継起的綜合のような心理学的プロセスが行われることで空間的把握が生じるという説明や、継起的綜合のような単位の蓄積という作業の成否によって空間的把握の成否を説明することなどが考えられる。しかし視覚の空間性についてこうした説明は与えられない。なるほど確かにカントは「超越論的感性論」において、継起的綜合という考えを持ち出す前に、直観形式としての空間について語っている。このことから対象の空間的把握は継起的綜合などを持ち出さなくても説明されると考えられるかもしれない。つまり直観形式が空間なのだから私たちが外的対象を見出す仕方は常に空間的なのだ、という説明が可能であると考えられるかもしれない。しかしこうした方針がまったく説明力をもたないことは明らかである。視覚は外的対象の直観だから空間的把握をもたらすのだと言われても、いかなる観点から直観が空間的把握をもたらすとされるのかはまったく明らかにされない。

さらにBを採用したカントは、自らの空間論を掘り崩してしまうだろう。周知のようにカントは空間がすべての外的対象の把握に必要なものだとしている。つまり空間はモダリティに関わらず外的対象の把握に必要なだと考えられている。しかしもしも彼がBを採用しているならば、いかにして彼は空間にこのような地位を与えることができたのだろうか。触覚にしか当てはまらない事態を彼が考えているならば、空間がすべての外的対象の把握に必要なものと主張することは難しいように思われる。もちろん外的対象の把握に関わるモダリティがすべて空間的把握をもたらすことが保証されれば、空間はすべての外的対象の把握の必要条件と呼ばれるかもしれない。しかしBを採用したカントが触覚以外のモダリティの空間性を説明するのに困難を抱えることは、上述した通りである。

したがってカントがBを採用していると考えるべきではないだろう。カントはKGには否定的に回答し、Bを回避する必要がある。また以上の考察が綜合の位置づけとは独立になされたことから明らかなように、Bの回避は空間に関わる継起的綜合をどのように考えようと要求されるものである。

そしてエヴァンズの恩恵は、まさにBを回避する方針としてVが存在することを教えてくれることにある。したがってVと同様の立場をカントから引き出すことが期待される。先に見たようにVの考えが擁護されるのは、ある主体が視覚などによって得られた情報を自らの行為、思想と結びつけられていることを、その人が対象を空間的に把握していることの表出として考えることによってであった。対象を空間的に把握しているならば、対象の空間的な性質に対応する形で、対象

に向かう、遠ざかるなどの異なる行動を主体は取れる必要があり、加えてそうした対象について、典型的には対象の形についての判断を下したりできる必要がある。したがってVと並行的な考えをカントから引き出そうとするならば、継起的綜合を空間的把握の表出と考えるのが近道となるだろう。つまり、使用されたモダリティが視覚であろうと触覚であろうと、ある人が継起的綜合に当たる手続きを行えるかどうかによって、その人が対象を空間的に把握したかどうかを考えるとということである。この考えによれば、例えばある人が自分は対象の形を把握したといくら主張しても、その人が継起的綜合にあたる手続きを実行できないならば、その人が対象の形を把握したとはされないということになる。空間的把握の成否はまさに一様に継起的綜合の成否によって判定されるのである。継起的綜合の要求は空間的把握の表出としての要求であり、それは特定のモダリティに限定されたものではない。このように考えればカントはVに非常に近い立場を採ることになり、KGに否定的に回答できるようになるだろう。

そこで次に必要なのは継起的綜合がこのように理解されることの検証である。しかしその前に綜合に関する既存の研究について触れておくべきことがある。最初に述べたように綜合の解釈はカント研究において問題であり続けている。本稿は綜合を主体の把握の表出として考える方針を提案したものの、その他にも綜合を心理学的プロセスとして捉えようとする人々もいる²⁴。この問題を決着させはしないものの、本稿が後者の方針を採用しない背景を多少なりとも明らかにしておく。実際のところ、後者の方針を採用してもVに近い立場をカントが採ることは可能かもしれない。したがって、カントがVを採用するためには継起的綜合が必ず表出として理解されなければならない、というのは正しくない。例えばすべてのモダリティに共通して空間的把握をもたらす心理学的プロセスが存在し、それが継起的綜合であるとされれば、カントは特定のモダリティに限定されないような理論を展開していたことになるだろう。しかし、この方針は心理学に関する多くの考察に依存するものであり、成功は保証されていない。加えてそうしたプロセスが発見されたとしても、カントが実際に擁護されるとは限らない。カントが心理学的な証拠を得ていたという保証はないため、彼の思いつきがたまたま今日の心理学の知見に的中していたという程度にしか、この方針は彼を弁護できないだろう。このように綜合を心理学的プロセスとして解釈する方針は多くの困難に見舞われる。とはいえ本稿はこの問題に決着をつけることはせず、Vに近い立場をカントから読み取るには綜合を空間的把握の表出として考えるべきであると想定し、以下ではこの想定を検証する。

4. 空間的把握と継起的綜合

この節では、カントの記述に基づいて継起的綜合の内実をより具体的に検討し、それが前節の提案通り、空間的把握の表出として理解可能なものであることを明らかにする。

さてカントは継起的綜合がはたらく場面として、以下のような例を挙げている。

したがって例えば私が家の経験的直観を、この経験的直観の多様なものの把握を通じて知覚とするならば、その際には空間と外的な感性的直観一般の必然的統一が私の根底に存しており、そして私はいわば家の形を、空間における多様なもののこの綜合的統一にしたがって、描くのである。(B162)

この直後には、引用文中で言及された綜合的統一が量のカテゴリー下での綜合によりもたらされるものであることが明言される。したがって、家を知覚する際の「いわば家の形を、空間における多様なもののこの綜合的統一にしたがって、描く」という作業が量のカテゴリーの下での綜合、つまり継起的綜合のはたらきとして理解されるだろう。このようにカントは形の把握を、形を描くことと結びつけている。同様の論点をカントは「直観の公理」でも述べている。

線を思想のうちで引くことなしでは、つまりある点から順にすべての部分を産み出し、それによってはじめてこの直観を描き出さなければ、私はどれほど小さいものであっても、いかなる線をも表象することはできない。(A162-3/B203)

ここでは線を把握するためには、まさしくその線を引いてみなければならないとされている。そしてここでの線を引く手続きは量の概念の下で行われるものだとされる。このようにカントは対象の形の把握を、形を描き出す作業と結びつけており、そうした作業を継起的綜合として考えているのである。

さてこうした描き出しの作業を対象の形の把握の表出として理解したとき、カントが要求することになるのは、その形をなぞったり描き出したりできなければならない、ということである。例えば四角形のものを把握したならば、私は辺がどこまで伸びており、どこで折れ曲がっているのか等々を指などでなぞることができる必要があるだろう。これは対象の形を把握したときに要求される事柄とし

てそれほどおかしくはない。対象の形を把握したにも関わらず、どの辺りが出っ張っているのかなどを指し示せないという事態は想像し難いだろう。そしてこれは対象の形を把握していることを、まさにその形に対応した「描く」「なぞる」という3次元的行為の観点から評価する考えであり、Vが依拠する空間的把握と行為との結びつきに近い考えである。したがって継起的綜合を空間的把握の表出として考え、カントの空間論をVに近いものとして理解することは可能だろう。

それでは思想との結びつきはどうだろうか。Vにおいては、主体が対象を空間的に把握しているなら、それに対応した思想をその人は抱ける必要があるとされていた。なるほどここでカントが継起的綜合を量のカテゴリー、つまり量の概念と関係させていることが評価されるかもしれない。カントは「ところで悟性はいかような概念に関して、それを通じて悟性が判断すること以外にはいかなる使用ももたない」(A68/B93)と述べており²⁵、概念を常に判断との関係で考えている。これを踏まえるなら量の概念をカントが強調するポイントは、まさに何らかの判断との関わりで捉えられるかもしれない。継起的綜合を量の下で考える彼の発想は、継起的綜合による手続きに加え、量の概念を使用した判断を空間的把握の表出として要求していることになりそうである。その際にはカントはVを採用していることになる。

しかし少なくとも思想と空間的把握との関係については、慎重な態度を取る必要がある。確かに上のような形で、思想と空間的把握の結びつきをカントに見出すことはできるかもしれない。しかしそのためには量の概念の内容を明らかにする必要がある。量の概念はカテゴリーであり、経験的な概念とははっきりと区別されているため、「四角形」や「球」などの概念と同一視することはできない。すると量の概念を用いた判断の具体的な内容が問題となる。ここへ来て私たちは「直観の公理」を巡って提起され、本稿では扱わないものとしてきたもう一つの問題、量の概念の具体的内容という問題に遭遇することになる。したがってカントが完全にVと同様の立場を採っていたと結論するのはやや尚早である。

とはいえ以上の考察により、継起的綜合を空間的把握の表出として考える可能性が開かれた。そしてこれは、カントがKGの批判を回避できることを意味する。継起的綜合というアイデアを含むカントの空間論は、KGを回避した上で空間のアプリオリ性を保存するものとして理解することが可能なのである。

5. 結論と展望

本稿は「直観の公理」を巡って提起された総合の役割に関する問題を、ケンプ・スミスの批判に答える形で扱ってきた。エヴァンズの検討を経て、その批判に答える選択肢としては、継起的総合を空間的把握の表出として考えることが有効であるというのが本稿の結論である。この選択肢がもつ利点は空間のアプリオリ性を守りつつ、空間的把握についての一定の説明を与えられることにある。そして実際にカントの記述がこの方針を妨げないことも本稿は見た。この成果から、継起的総合と空間的把握の関係が多少なりとも明らかになったであろう。

¹ 例えば A77-8/B103 を参照。

² 総合をはじめとした『批判』の心理学的解釈としては Kitcher (1990) や Longuenesse (1998) が挙げられ、心理学的解釈への批判としては Strawson (1966) がある。

³ これらは主に心理学方面で用いられる語であるものの、本稿と同様の問題を扱う哲学的研究においても広く用いられている。例えば Campbell (2005)、Hopkins (2005)、Levin (2008) を参照。

⁴ 例えば A24/B38-9 などを参照。

⁵ 岩井 (2013, 165-6) を参照。

⁶ もちろん対象の空間的把握のために必要な総合が量の概念の総合に尽きるという訳ではない。しかし本稿ではひとまず「直観の公理」の記述に焦点を絞ることにする。

⁷ 感性については A19/B33、悟性については A68/B93 などの箇所を参照。

⁸ 対象が与えられることと直観の関係については例えば A239/B298 を参照。

⁹ Guyer (1987, 193) の様に、この箇所と「超越論的感性論」との整合性に関する問題も当然指摘されうるものの、本稿はこれを扱わないこととする。

¹⁰ A77/B103 を参照。

¹¹ 例えば「純粋悟性概念の図式機能について」において「悟性の概念の量としての、量 (quantitatis) の純粋図式は数であり、数は一を一 (同種のもの) に継的に加算することを包括する表象である」(A142/B182) とされており、また「直観の公理」においても量の概念に関わる総合は「(部分から部分への) 継起的な総合」(A163/B204) とされている。

¹² 例えば B162 や A162-3/B203 を参照。本稿はこれらの箇所を後に再び取り上げる。

¹³ Smith (2003, 348) を参照。

¹⁴ Guyer (1987, 196) でガイヤーは二つの根拠を挙げてケンプ・スミスの批判を退けている。しかしここでは彼の返答は脇に置くこととする。なおモダリティへの着目は彼も行っていないため、彼のケンプ・スミス反駁が本稿の議論をすぐさま崩すことにはならないと思われる。

¹⁵ Evans (1985, 365-6) を参照。エヴァンズ型のモリニュー問題を発展させる試みとしては Levin (2008) を参照。

¹⁶ 本稿の主題ではないが、元々のモリニュー問題に対する明確な解答はカントの著作には見られない。この点およびカントのあり得たであろう返答については Sassen (2004) を参照。

¹⁷ 実際には事態は複雑であり、B を採ることと盲人が術後にももの形を判定できると考えることは独立である。もしも視覚と触覚に相対化された空間的概念を先天的に結合できるならば、盲人は術後にももの形を判定できることになる。他方そうした結合が経験的にしか得られないならば、盲人は視覚で形の判定を行うことはできないことになる。したがって盲人の判定可能性に関する立場がそのまま V と B の違いに繋がるわけではない。しかし理解されるべきは、B

においては視覚と触覚にそれぞれ相対化された形で空間的概念が考えられているということである。詳しくは Evans (1985, 377-8) を参照。

¹⁸ Campbell (2005) は情報処理がモダリティ毎に異なる可能性を指摘し、エヴァンズの議論を批判する。しかし先に見たように V が依拠するのは、同じ種類の行動と思想を、モダリティに関わらず空間的把握の表出として要求するという考えである。したがってその批判はエヴァンズと噛み合っているとは言えない。他方 Hopkins (2005) は、一見もつとらしく思われるそうした表出の要求の妥当性を疑問視する。彼は反例を示すまでは至っていないものの、重要な論点を提示していると言える。

¹⁹ なるほど手術を受けたにも関わらず主体が期待される振る舞いをできないかもしれない。しかし V は、主体が触覚の段階から空間的把握をもたらす概念を習得していなかったとするか、手術によって確かに目は開いたものの、主体は視覚によって空間的な情報を得るには至っていないとするだろう。そしてこの二つの障害がクリアされていることは、まさにモリニュー問題において想定として認められていた。したがって V によれば、もしモリニュー問題のような想定が可能ならば、主体は一つ概念を拡張できなければならないということになるだろう。

²⁰ 傍点原文イタリック。

²¹ Evans (1985, 396-9) を参照。

²² Evans (1985, 397) を参照。

²³ Evans (1985, 398) を参照。

²⁴ 注の 2 を参照。

²⁵ 引用箇所「こうした概念」という表現は、何か特殊な概念を指示しているのではなく、直観と対比される限りでの概念一般を指示していると理解される。したがって引用箇所は、概念一般をカントが判断との関係のもとで考えていたことを示すと言えるだろう。

[参考文献]

引用者による補いは全引用において [] で表す。なお『純粋理性批判』の頁数は慣例に従い第 1 版を A、第 2 版を B としその後には頁数を付す形で参照し、原文ゲシュペルトは傍点で表す。

Campbell, John. 2005. "Information Processing, Phenomenal Consciousness, and Molyneux's Question," in *Thought, Reference, and Experience: Themes from the Philosophy of Gareth Evans*, José L. Bermúdez, Clarendon Press, 195-219.

Evans, Gareth. 1985. "Molyneux's Question," in *Collected Papers*, Oxford University Press, 364-99.

Guyer, Paul. 1987. *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press.

Hopkins, Robert. 2005. "Molyneux's Question," *Canadian Journal of Philosophy*, 35(3), 441-64.

Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.

Kitcher, Patricia. 1990. *Kant's Transcendental Psychology*, Oxford University Press.

Levin, Janet. 2008. "Molyneux's Question and the Individuation of Perceptual Concepts," *Philosophical Studies*, 139(1), 1-28.

Longuenesse, Béatrice. 1998. *Kant and the Capacity to Judge*. trans. by Charles T. Wolfe. Princeton University Press.

Sassen, Brigitte. 2004. "Kant on Molyneux's Problem," *British Journal for the History of Philosophy*, 12(3), 471-85.

Smith, Norman K. 2003. *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'; with a new introduction by Sebastian Gardner*, Palgrave Macmillan.

Strawson, P. F. 1966. *The Bounds of Sense. An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Methuen.

岩井拓朗. 2013. 「『純粋理性批判』における感覚と対象」, 『論集』, 第 32 号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 160-73.